

日本思想大系
13

道元下

岩波書店刊行

目次

凡例……………五

正法眼藏……………九

第四十一	三界唯心	………	二	第五十	洗面	………	九
第四十二	說心說性	………	七	第五十一	面授	………	一九
第四十三	諸法實相	………	三五	第五十二	仏祖	………	一九
第四十四	仏道	………	三六	第五十三	梅花	………	二三
第四十五	密語	………	三五	第五十四	洗淨	………	二三
第四十六	無情說法	………	二	第五十五	十方	………	三四
第四十七	仏經	………	三	第五十六	見仏	………	四
第四十八	法性	………	三	第五十七	遍参	………	六
第四十九	陀羅尼	………	七	第五十八	眼睛	………	七

第五十九	家 常	二七三	第六十八	大修行	二八〇
第六十	三十七品菩提分法	二七九	第六十九	自証三昧	二八〇
第六十一	竜 吟	二八九	第七十	虛 空	二八一
第六十二	祖師西來意	二〇三	第七十一	鉢 盂	二八六
第六十三	発菩提心	二〇七	第七十二	安 居	二八九
第六十四	優曇華	二二五	第七十三	他心通	二八二
第六十五	如来全身	二二九	第七十四	王索仙陀婆	二九三
第六十六	三昧王三昧	二三三	第七十五	出 家	二九八
第六十七	転法輪	二二七			

十二卷正法眼藏

第一	出家功德	三〇七	第七	深信因果	四三〇
第二	受 戒	三三四	第八	三時業	四三九
第三	袈裟功德	三四〇	第九	四 馬	四三三
第四	発菩提心	三七一	第十	四禪比丘	四三九
第五	供養諸仏	三八二	第十一	一百八法明門	四七八
第六	婦依仏法僧宝	四二四	第十二	八大人覺	四九〇

校 異……………四九七

涉 典……………五〇四

主要祖師略解説……………五〇九

道元關係中国地図……………五三四

解 説

道元における分裂……………寺田 透……………五四一

「道元」上下巻の本文作成を終えて……………水野弥穂子……………六〇二

道元禪師略年譜……………六二五

参考文献……………六二五

「道元上」目次

辦道話(九)

正法眼藏(三三)

第一	現成公案(三五)	第十五	光明(二五)	第二十八	礼拝得髓(三七)
第二	摩訶般若波羅蜜(四〇)	第十六	行持上(二六)	第二十九	山水經(三二)
第三	仏性(四五)	第十七	行持下(二九)	第三十	看經(三四)
第四	身心學道(七四)	第十八	恁麼(三三)	第三十一	諸惡莫作(三五)
第五	即心是仏(八一)	第十九	觀音(三三)	第三十二	伝衣(三六)
第六	行仏威儀(八七)	第二十	古鏡(三八)	第三十三	道得(三八)
第七	一顆明珠(一〇二)	第二十一	有時(三五)	第三十四	仏教(三九)
第八	心不可得(一〇八)	第二十二	授記(六四)	第三十五	神通(四〇)
第九	古仏心(二三)	第二十三	全都機(七六)	第三十六	阿羅漢(四二)
第十	大悟(二八)	第二十四	画餅(八三)	第三十七	春秋(四三)
第十一	坐禪儀(二五)	第二十五	溪声山色(八九)	第三十八	葛藤(四五)
第十二	坐禪箴(二七)	第二十六	仏向上事(三〇)	第三十九	嗣書(四三)
第十三	海印三昧(四一)	第二十七	夢中說夢(三〇)	第四十	栢樹子(四五)
第十四	空華(四八)				

凡例

- 一 本書には、「正法眼蔵」七十五巻のうち第四十一巻から七十五巻まで、及び十二巻「正法眼蔵」を収めた。
 一 本書に用いた、「正法眼蔵」各巻の底本は次の通りである。

正法眼蔵

第四十一	三界唯心……洞雲寺本	第五十二	仏 祖……乾坤院本
第四十二	説心説性……乾坤院本	第五十三	梅 華……
第四十三	諸法実相……	第五十四	洗 淨……
第四十四	仏 道……	第五十五	十 方……全久院本
第四十五	密 語……	第五十六	見 仏……洞雲寺本
第四十六	無情説法……洞雲寺本	第五十七	遍 参……乾坤院本
第四十七	仏 經……乾坤院本	第五十八	眼 睛……洞雲寺本
第四十八	法 性……洞雲寺本	第五十九	家 常……
第四十九	陀羅尼……	第六十	三十七品菩提分法……乾坤院本
第五十	洗 面……乾坤院本	第六十一	竜 吟……洞雲寺本
第五十一	面 授……	第六十二	祖師西来意……

(一部永平寺蔵真筆本)

凡 例

第六十三	堯無上心……………洞雲寺本	第七十	虛 空……………洞雲寺本
第六十四	優曇華…………… ”	第七十一	鉢 盂…………… ”
第六十五	如來全身…………… ”	第七十二	安 居…………… ”
第六十六	三昧王三昧…乾坤院本	第七十三	他 心 通……………乾坤院本
第六十七	轉法輪…………… ”	第七十四	王索仙陀婆…………… ”
第六十八	大修行…………… ”	第七十五	出 家…………… ”
第六十九	自証三昧…………… ”		

十二卷 正法眼藏

第一	出家功德……………洞雲寺本	第七	深信因果……………秘密正法眼藏本
第二	受 戒……………秘密正法眼藏本	第八	三時業……………洞雲寺本
第三	袈裟功德……………洞雲寺本	第九	四 馬…………… ”
第四	堯菩提心…………… ”	第十	四禪比丘……………永光寺本
第五	供養諸仏…………… ”	第十一	一百八法明門…………… ”
第六	婦依仏法僧宝…………… ”	第十二	八大人覺……………秘密正法眼藏本

一 翻字にあたっては、底本を忠実に再現することにとめた。底本の字句を改めた時は、▽印をつけ、巻末に「校異」として記録した。ただし、明らかな誤り及び他の諸本により容易に見分けられる底本独自の異文の訂正は一々挙げなかった。

一 読解に資するため、段落分け・改行を行い、句読点・引用符などを付した。

- 一 仮名は現行普通の平仮名字体に改めた。
- 一 濁音符号は校訂者においてつけた。
- 一 仮名づかいは底本通りとしたが、読解を助けるため、必要に応じて、右側に()に入れて歴史的仮名づかいを示した。
- 一 漢字は、当用漢字表にあるものは同字体表により、当用漢字表にないものは現行普通の字体に改めた。
- 一 振仮名は、底本にあるものは片仮名で、校訂者によるものは平仮名でつけた。校訂者による振仮名は歴史的仮名づか
いによった。底本にある仮名で妥当でないと思われるものは削った。
- 一 漢文の句読点・返点などは、古写本の読みにもとづいて、校訂者が補った。
- 一 漢文につけられている振仮名は、底本にあるものだけを片仮名で付した。
- 一 漢文の読み下しは《 》の中に入れて、校訂者が加えた。
- 一 本文中、典拠のある文及び語については、巻末に「渉典」の項を設け、一括してこれを示した。ただし、繁を避ける
ために、渉典記述のある語句について、頭注に見出し項目を掲げたり、本文に記号をつけたりすることはしなかった。
- 一 「渉典」については、上巻の解説を参照されたい。
- 一 主要祖師には*印を付し、その略解説を巻末にまとめて掲げた。なお、上巻の「主要祖師略解説」で解説したものは、
上巻での見出し項目とその頁数を示した。
- 一 本文の作成、校異・渉典・主要祖師略解説・道元禅師略年譜・参考文献の執筆は水野弥穂子が当った。
- 一 頭注を施す語は*印をもって示し、その執筆には寺田透が当った。
- 一 解説はそれぞれの題目の下に両者が分担執筆した。

一 卷末に道元関係中国地図及び地名表を掲げた。これは、理学博士多田文男教授にお願いし、駒沢大学地理学科博士課程修了、郭婉順氏によって作成された。

一 本書に使用した主な書名略号は左の通りである。

伝燈録—景德伝燈録 会要—聯燈会要 普燈録—嘉泰普燈録

広燈録—天聖広燈録 三百則—正法眼藏三百則

また、「洞山良价禅師語録」「百丈懷海禅師語録」などの語録類は、「洞山録」「百丈録」などの略称を用いた。

一 なお、上巻の「解説」「伝燈仏祖法系略図」も併せ参照されたい。

頭注における中国文の解釈、のみならず本文の訓読についても、上巻にひきつづき入矢義高氏の教示に負うところが多い。あつく御礼申上げる。併せて、頭注の中に尊名を掲げるにあたり敬称を省いた点はお許し願いたい。

本文作成にあたって、必要な写真の借覧を快諾された竹之内静雄氏に深く感謝の意を表する。

正
法
眼
藏

是三 上の三者。心、仏、衆生。
挙力 力を挙つてのこと。下の「尽力の全挙」は力のごとくをすべて用いてのこと。

強為・云為の為 強為(無理な行い)とされるような、又、云為(言動。ここでは正当普通の行い)とされるような「為(行い)」。

いく玲瓏八面も 全方面がどんなに透き通って明らか(な世界)であつても。三界(欲・色・無色の三種)は、凡夫の生き死にする因果の世界。それを「唯一心」というときの「心」は(理・性)のこと。

摠不著 みんないけない。著は宜。上の「誤錯すといふとも」は、そういう場合があつても、それは、の意。三界の所見 三界で見るところ。

見不正 見レドモ正シカラズ。旧窠 古果。旧態。「新条」は新規のもの。併せて、古今を通じて成立つもの。

也 句の中間におく強めの助辞。不如三界見於三界 三界ノ三界ヲ見ルニ如カズ。主体の自己認識こそ貴重であるの意を持つ。

この所見 ここで見られているもの。本有 もともとあるもの。「今有」は今(現世)においてはじめてある存在。上四五頁十四行の用法とやや異なる。また、三四九頁「中有」注参照。

正法眼蔵第四十一

さん がい ゆい しん
三界唯心

しやか だいいし だう
釈迦大師道、

さん がい ゆい しん
三界唯一心、心外無別法。

しん ぶつ ぎふ しゆ じやう *せ さん ぶ しやべつ
心仏及衆生、是三無差別。

一句の道著は一代の挙力なり、一代の挙力は尽力の全挙なり。たとひ強為の為なりとも、云為の為なるべし。このゆへに、いま如来道の三界唯心は、全如来の全現成なり。全一代

は全一句なり、三界は全界なり、三界はすなはち心といふにあらず。そのゆへは、三界はいく玲瓏八面も、なを三界なり。三界にあらざらんと誤錯すといふとも、摠不著なり。内外中間、初中後際、みな三界なり。三界は三界の所見のごとし。三界にあらざるもの、所

見は、三界を見不正なり。三界には三界の所見を旧窠とし、三界の所見を新条とす。旧窠也三界見、新条也三界見なり。このゆへに、

*ふ *ふ
釈迦大師道、「不如三界、見於三界」。

*この所見、すなはち三界なり、この三界は所見のごとくなり。三界は本有にあらず、三

初中後にあらず 時間的に継起する世界ではない。

今此三界 「今此の三界にある」の意。

機関の：相見 はたらきがはたらきと相会い、一致する。はたらきの現成ということである。

今此三界は：今此の三界にありというの三界で見ること、その見ることというの三界でやることなのだ、三界で見るといふのは三界を現実化させることなのだ。すなわち三界が現実化することなのだ。

我有（われの）所有。

今此は 今此のと言ってもそれは。罣礙 その第二義による。

眞実人体 眞実人の体。しかしここ

では「（の）眞実」乃至「（の）体」のみ有意。

生衆 衆生の倒置。生ける存在の意と、どちらから見ても衆生であるものの意を兼ねる。↓上四五―六頁

子也全機現 すべての子は子としてそのはたらき、機縁、機構のすべてが現実化されてある。

而今は：今というのとはどちらが前どちらが後だとか、あるいは両者共存とかの関係を言うのではない。すなわち全存在の存在様態である。

「吾子の道理」は、右の経文に言う「吾子」という表現の道理の意。

仏祖老少 仏祖の老少。仏祖の場合、の老を：功夫参究すべし 父の

界は今有にあらず。三界は新成にあらず、三界は因縁生にあらず。三界は初中後にあらず。出離三界あり、今此三界あり。これ機関の機関と相見するなり、葛藤の葛藤を生長するなり。今此三界は、三界の所見なり。いはゆる所見は、見於三界なり。見於三界は、見成三界なり、三界見成なり、見成公案なり。よく三界をして発心・修行・菩提・涅槃ならしむ。これすなはち皆是我有なり。このゆへに、

釈迦大師道、「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子」。

いまこの三界は、如来の我有なるがゆへに、尽界みな三界なり。三界は尽界なるがゆへに、「今此」は過現当来なり。過現当来の現成は、今此を罣礙せざるなり。今此の現成は、過現当来を罣礙するなり。

「我有」は尽十方界眞実人体なり、尽十方界沙門一隻眼なり。衆生は尽十方界眞実体なり。一々衆生の生衆なるゆへに衆生なり。

「悉是吾子」は、子也全機現の道理なり。しかあれども、吾子かならず身体髪膚を慈父にうけて、毀破せず、虧闕せざるを、子現成とす。而今は父前子後にあらず、子先父後にあらず。父子あひならべるにあらざるを、吾子の道理といふなり。与授にあらざれどもこれをうく、奪取にあらざれどもこれを忍たり。去來の相にあらざ、大小の量にあらざ、老少の論にあらざ、老少を仏祖老少のごとく保任すべし。父少子老あり、父老子少あり。父老子老あり、父少子少あり。ちの老を学するは子にあらず、子の少をへざらんはちの

老を學んで自分も老になるのは子でないかどうか、子の若さを経ないのは父でないか、子でも父でもそれぞれに老と少と少とあるのではないか、そうでないか云々。

慈父を墨礙 主格は「父子」。慈父の現生を妨げず、一方「吾子を現生」とつづく。

吾子 吾は断章のための冗辭。

安処は：已離なり 安処は安心の（心を安らかに置くべき）処の意だろう。林野はそういうものだが、それを「已ニ離レ」ている、それにもと執しないの意。

其父の道（如来は全部の人間をわが子というだけで）その（如来の）父に関する言及は。↓解説

応化法身 応身化身法身という仏の三身。三種の存在様態↓上八七頁「報仏」注

藏 梵原語は箱、籠、文書の集積。

「界」の梵原義は層、成分等。

外道大有經 大いなる有すなわち梵を説くバラモンの經典か。紀元前二―一世紀に成立した實在論的自然哲學の一派 Vaiseshika（勝論）の六範疇（六句）の一をさすという説明もあるが、「釈迦牟尼仏道」とは時代が合わない。あるいは逆に所引經の成立年代を定める根拠とするか。

無外 この語多義。今「王者無外」の用法に従う。（その）外がない。すべては（その）内だ。↓校異

あらざらん。子の老少と、父の老少と、かならず審細に功夫参究すべし、倉卒なるべからず。父子同時に生現する父子あり、父子同時に現滅する父子あり。父子不同時に現生する父子あり、父子不同時に現滅する父子あり。慈父を墨礙せざれども吾子を現生せり、吾子を墨礙せずして慈父現成せり。有心衆生あり、無心衆生あり。有心吾子あり、無心吾子あり。かくのごとく、吾子、吾、ことごとく釈迦慈父の令嗣なり。十方尽界にあらゆる過現当来の諸衆生は、十方尽界の過現当の諸如来なり。諸仏の吾子は衆生なり、衆生の慈父は諸仏なり。しかあればすなはち、百草の花果は諸仏の我有なり、岩石の大小は諸仏の我有なり。安処は林野なり、林野は已離なり。

しかもかくのごとくなりといふとも、如来道の宗旨は「吾子」の道のみなり、其父の道いまだあらざるなり、参究すべし。

釈迦牟尼仏道、「諸仏応化法身、亦不出三界」。々々外無ニ衆生、仏何所レ化。是故我言、三界外别有ニ衆生界藏者、外道大有經中説、非ニ七仏之所説「諸仏応化の法身も、また三界を出でず。三界の外に衆生無し、仏何の化する所かあらん。是の故に我れ言ふ、三界の外に別に一衆生界藏有りといふは、外道大有經中の説なり、七仏の所説に非ずと」。

あきらかに参究すべし、「諸仏応化法身」は、みなこれ「三界」なり、無外なり。たとへば如来の無外なるがごとし、牆壁の無外なるがごとし。三界の無外なるがごとく、衆生無外なり。無衆生のところ、「仏何所化」なり。仏所化はかならず衆生なり。

慮知念覚 慮知(思慮分別)と念覚(分別心)。上の「無有錯謬」はアママリアルナシ。
胎卵湿化 ↓上九一頁「胎生・化生・湿生・卵生」注
青黄赤白 ↓上二八六頁「陰陽の運」注

諸法実相心 諸法実相(↓上二五一頁注。事物現象の本質的真實性)という存在様態においてある心、それをわがものとしている心。

桂琛 羅漢桂琛。自称。↓祖師会弘法人 弘法ヲ会(得)セル人。そんなことでは、大地を舐しても弘法を会得した人に会おうとしても会えないなあ、の意。

しるべし、三界外に一衆生界蔵を有せしむるは、外道大有経なり、七仏経にあらざるなり。唯心は一二にあらず、三界にあらず。出三界にあらず、無有錯謬なり、有慮知念覚なり、無慮知念覚なり。牆壁瓦礫なり、山河大地なり。心これ皮肉骨髓なり、心これ拈花破顔なり。有心あり、無心あり。有身の心あり、無身の心あり。身先の心あり、身後の心あり。身を生ずるに胎卵湿化の種品あり、心を生ずるに胎卵湿化の種品あり。青黄赤白これ心なり、長短方円これ心なり。生死去来これ心なり。年月日時これ心なり。夢幻空花これ心なり、水沫泡焰これ心なり、春花秋月これ心なり、造次顛沛これ心なり。しかあれども毀破すべからず、かるがゆへに諸法実相心なり、唯仏与仏心なり。

☆玄砂院宗一大師、問ニ地藏院真応大師云《玄砂院宗一大師、地藏院真応大師に問うて云く》、「三界唯心、汝作麼生会」。

真応指ニ椅子一曰《真応、椅子を指して曰く》、「和尚喚ニ遮箇一作ニ什麼ニ《和尚遮箇を喚んで什麼とか作す》」。

大師云、「椅子」。

真応曰、「和尚不レ会ニ三界唯心ニ《和尚三界唯心を会せず》」。

大師云、「我喚ニ遮箇一作ニ竹木一、汝喚作ニ什麼ニ《我れ遮箇を喚んで竹木と作す、汝喚んで什麼とか作す》」。

真応曰、「桂琛亦喚作ニ竹木ニ《桂琛もまた喚んで竹木と作す》」。